

校内授業研究会

(生活科・算数科)

6月8日(月)に生活科・算数科の校内授業研究会が行われました。今回は算数科の共同研究者である鳥取大学の矢部敏昭教授に参加していただき、授業の評価方法を中心に講演していただきました。

今回の研究会は2つの授業ともに「研究の観点」として「子供たちから生まれる問い」が重要でした。研究会ではその点について全職員で意見交換をして、今後の研究に生かせるように話し合いを深めました。



《生活科》

生活科では、子供が自らの問いをつむぎ、学習活動を考えるために必要な教師の問いかけの条件や制約を検討するために、1年生「がっこうをたんけんしよう」の学習を行いました。子供たちは、これまでの学校探検を振り返り、そこで出会った「人」について、気になっていることやもっと知りたいと思っていることを見つめる活動を行いました。「校長先生は、大学の先生だって知っているけれど、どんなことをしているのかな。」「6年生は、1年生よりもたくさん勉強している。どんな勉強があるのかな。」などのように、無自覚だった既有知識を自覚し、まだ知らないことに対する問いを立てている様子が見られました。

研究協議では、生活科の特徴である探究的な学習を想定し、授業を通して教師の問いかけからどのように子供の問いがつけられたかを分析することを柱に話し合いを行いました。今後は、学問入門期である1年生に行う問いかけのあり方について、どのような制約

があるのかを検討することも含め、研究を進めていきます。



《算数科》

子供が問いをもって数学的に問題解決を図るために必要な問題の条件を検証するため、2年生「長さ」の単元で研究授業を行いました。その単元における課題の解消を目指しながらも、問題に対して子供の問いが発生したり、子供が問題を発展的に考察したりすることを意図し、問題を設定し、その機能の検証を図りました。

実際の授業では、「長さすごろく」という学習場面を設定し、ルールやゴールまでの行き方を検討した上で、実際にすごろくをする活動を行いました。「長さすごろく」のゴールをどこにするのかを話し合うことを通して、「20 cmだと長すぎる。」「10 cmだとぴったりにならない。」「もう1回さいころを振りたい。」と子供が問題に働きかけている姿が見られました。今後の課題として、設定した問題から出された子供の考えをどう数学的に解釈するかを検討することを踏まえ、研究を進めていきます。



校内授業研究会

(図画工作科・算数科)

6月15日(月)に図画工作科・算数科の校内授業研究会が行われました。今回は図画工作科の共同研究者である鳥取大学の武田信吾先生に参加していただき、発達段階に合わせた教材・教具の使い方や、作品づくりにおいて子供たちは視覚だけでなく、感触を大切に描くこともあるというお話を聞かせていただきました。

それぞれの授業についての協議では、研究の視点に合わせて活発な意見交換が行われ、今後の研究に生かせるように話し合いを深めました。



《図画工作科》

試行錯誤を通した子供の作品や行為の変容を捉えることを目的として、3年生「わたしの6月の絵」の研究授業を行いました。試行錯誤を通して子供が表したいことを見付けたり、さらに高めようとしたりする姿が見られるのではないかと思います、研究を続けています。



授業では、イメージする6月の絵を表すために混色をいろいろ試しながら、できた色をどのように表すのか試しながら

することをめあてにして絵に表していきました。5月に行った「色+水+筆=いいかんじ!」という学習を生かして、筆を細く使って雨が降っている様子を表したり、にじませることであじさいの花を描いたりする姿が見られました。一方で、色を混ぜることに目を向ける子供が少なかったため、子供たちがより試したいという思いになるような工夫がさらに必要だと感じました。今後も試行錯誤を通して、表したいことを見付け高めようとする子供の育成を目指した授業づくりを進めていきます。

《算数科》

数学的に考える力の中でも、特に大切な統合しながら発展的に考察する力を育成するために、導入問題に着目して研究を進めています。本時では、H.freudenthalのREM理論をふまえ、子供にとって現実的な(十分イメージできる)導入問題を設定しました。



設定した数学的活動により、記数法や命数法、自然数の仕組み、累加的な見方や相対的な見方など、本単元で学んでいく数学的な要素がほぼ出てきたのですが、子供の問いは、問題として提示された「大きな数のきまりを使って」の意味理解にあったようです。

本時は、単元の導入でしたので、本単元の学習を進めるうえでの課題づくりの時間ととらえ、「大きな数のきまりを発見しよう」とするべきだったように思います。

今後、導入問題が含むべき条件や子供が個人レベルで、どのような問いをもつのかを把握する手立てを工夫していきます。